



OR の躍進のために

——会長就任挨拶——

森 口 繁 一*

これから2年間の任期中、主題はなんといっても来年夏の合同国際会議である。これを成功させるためには、第1に設営、プログラム、案内状、等々の準備の仕事、第2に論文発表、現場討論会、事例研究会、等々の内容充実のための諸活動、そして第3に、これら全体を支える募金活動が必要である。これらすべてにわたって会員諸君と共に大いにがんばっていききたいものである。

TIMSの大会テーマは、「時は来たり」である。いよいよORの真価が問われる時が来たというわけであろう。公害・交通・流通・住宅・資源・エネルギー・教育など、現在の世の中の大きい問題のどの一つをとってみても、その問題の解決のためにオペレーションズ・リサーチに期待されるところは、きわめて大きいものがある。

自信のあるORマンにとっては、ほんとうにおもしろい、やりがいのある時が来たといえよう。それほど自信のない人にとってはあるいは「こわい時」が来たのかもしれない。「上の人がORを認めてくれないから何もできない」とか、「まわりの理解がないから何をいってもむだだ」とかいった言い訳はもはや通用しないからである。「いまこそあなたの力を思う存分に発揮して見せてくれ」といわれて、「実は何もできませんのでして……」とはいえた義理ではない。どうしてもほんとうの問題そのものに立ち向かって、その解決に進まねばならない。ORマンがきびしくきたえられる、そしてその価値が正しく認識され評価される、ORの躍進の時が来たのである。

もちろん、ORマンだけが問題の解決に当たるわけではない。いろいろな専門の人たちといっしょに事に当たらねばならない。「学際的」な接近が必至である。異なる専門の人から成るチームの中で、本学会の会員であるORマンには、問題全体の本質を見抜く力において、複雑な関連を整理して比較的扱いやすいモデルを構成する力において、かつまた線形計画法や待ち行列理論のようなもろもろの標準的な手法の適用、ならびに斬新な新手法の開発の力において、「ORの専門家」としての期待がかけられているはずである。このような期待にこたえて、仲間に信頼される専門家らしい専門家として伸びてゆくためには、不断の修練が必要である。そのような修練の場として役立つことが学会の使命である。

学会は、この使命を果たさねばならない。来年の合同国際会議を跳躍台として、現場と研究室との連携、地方と中央の交流、他学会との交流などを含めて、さまざまな方面にわたって学会活動を展開していきたいと思う。会員諸君の積極的なご参加、ご活躍を心から期待する次第である。

* 東京大学工学部教授